谷口藍田展

RANDEN TANIGUCHI

旅に生きた儒学者の生涯

儒学者・谷口藍田。彼は文政５年（1822）に有田で生まれた儒学者で、明治３５年（1902）に80歳で亡くなるまで、その生涯を教育と人材育成に捧げた人でした。そして、その足跡は広く、まさに旅に生きた儒学者でした。

そして、彼が生きた幕末～明治期は近代国家への胎動の時期であり、価値観が目まぐるしく移り変わった時代でもあります。その中で彼は儒学という学問を変容する時代に即応させて実践しようと試みています。

しかし、彼が儒学との融合を図ろうとした皇道は、やがてこの国のファシズム化を担うことになります。彼ほどの人物でも結局は時代の枠を超えることはできなかったようです。今回は彼の思想そのものを評価するのではなく、価値観が渾沌とした時代に学問の追求のために真摯な姿勢を貫いた一儒学者の生き方に焦点をあててみたいと思います。

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No.32

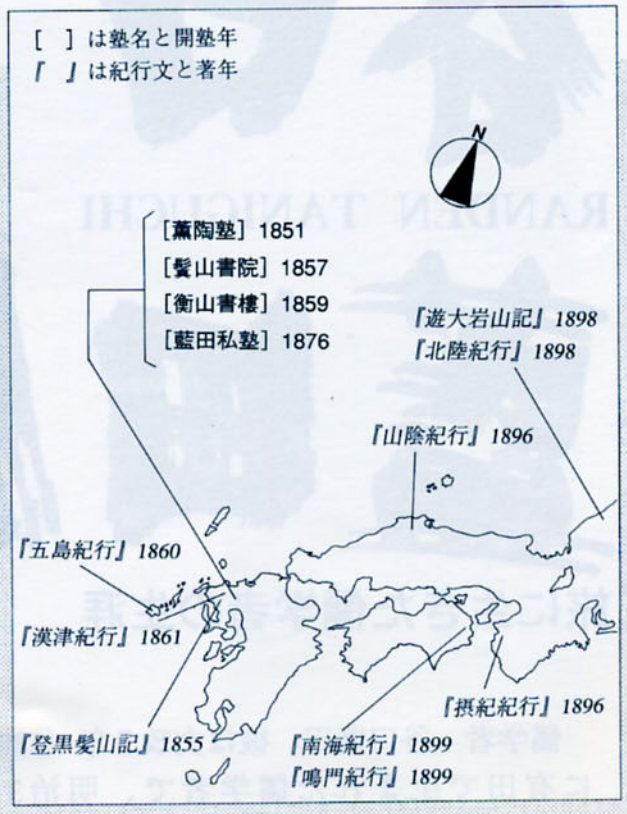
I 江戸儒学の流れ

儒学は、中国春秋時代の思想家・孔子（紀元前551～479）の教えをもとにした学問です。日本では16世紀後半から17世紀にかけて、京都五山を中心に朱子学を主流とした儒学が学ばれていました。

日本近世儒学の祖といわれる藤原惺窩は、京都相国寺の禅僧でしたが、文禄・慶長の役で連行されてきた朝鮮朱子学者・姜沆との出会いで大きな影響を受け儒学者となりました。門人の林羅山は儒官として幕府に重用され、儒教思想によって幕府封建体制の基礎を築きました。幕府や諸藩は、幕藩体制の確立を目ざして儒学を奨励し、各地に藩校や私塾が創設され、広く民間にまで普及してゆきました。

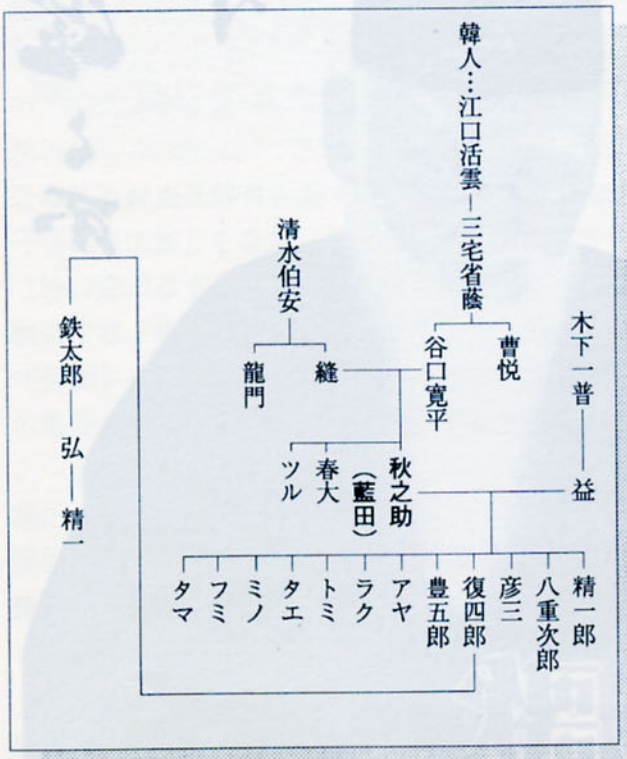
儒学が盛んになると様々な門流が生まれ、これらの儒教解釈によって育った人々によって幕末の日本は攘夷論・開国論に揺れ、討幕王政復古へと激動の時代を迎えることになりました。

幕藩体制を支えるための儒教思想が、体制破壊の原動力ともなっていったのです。



↑ 藍田の主な足跡（1）ー開塾と紀行を中心にー

II 藍田の生い立ち



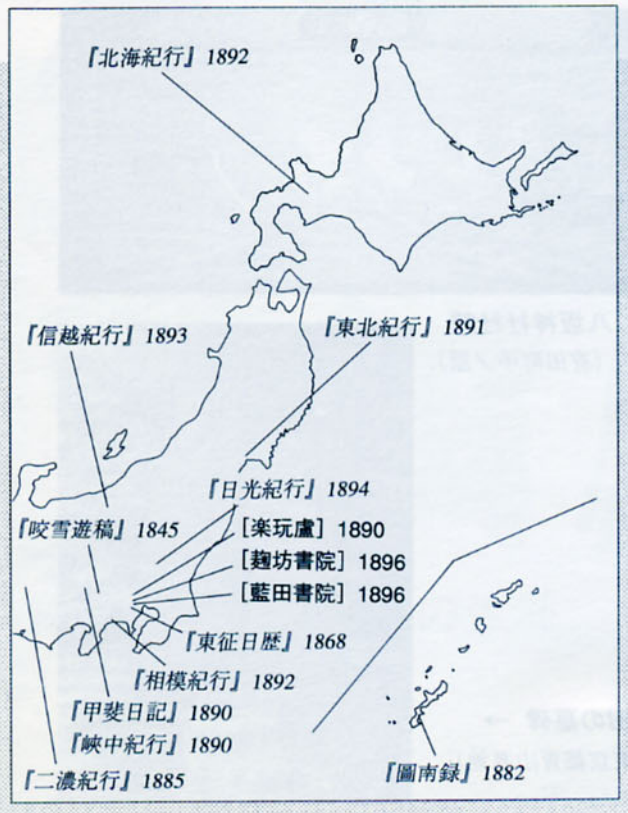
↑ 谷口藍田家系図（浦川晟氏調査による）

谷口藍田は文政５年（1822）８月15日、有田白川で生まれ幼名を秋之助、のち韓大明、韓中秋、藍田と号しました。父は韓人の子孫で皿山代官所役人・谷口源兵衛、母は儒者清水龍門の姉で縫といいました。幼くして父や叔父から四書五経や武芸を学びました。学問より武芸を好んだ藍田でしたが、父の友人馬島文岱の訓戒を受け、学問に生涯をかける決意を固めました。

18歳で英彦山の玉蔵坊に易を学び、さらに日田の広瀬淡窓の咸宜園に入門、塾頭を務めました。21歳で江戸の儒学者羽倉簡堂に入門、佐藤一斉・佐久間象山や蘭学者坪井信道・伊東玄朴らとの交流で、海外への思いをはせながら大きく成長しました。高野山や京都では諸仏典の研究も行っています。

26歳になった藍田は、咸宜園や東遊での修学未熟を感じ、さらに佐賀藩校弘道館に入り草場佩川・武富圯南に学び、副島種臣・江藤新平らとの交流を深めました。

Ⅲ 開塾と欧米への関心

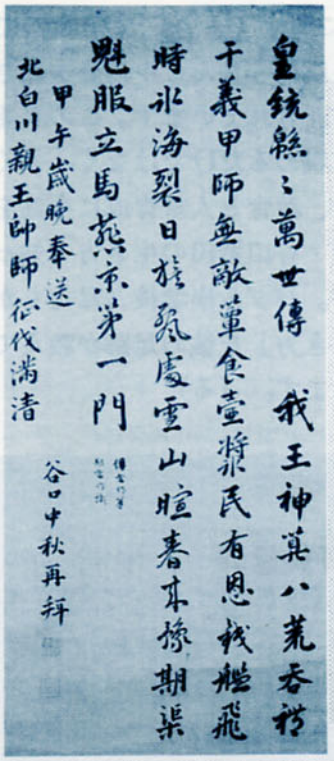


↑ 藍田の主な足跡（2）―開塾と紀行を中心に―

嘉永4年（1851）30歳の藍田は、白川で最初の私塾を開きました。門人多数のため、黒髪山麓に「髪山書院」を開設しましたが、失火により焼失し、有田の「衝山書樓」に居を移しました。その後、西九州各地を歴遊した藍田は長崎を訪れ、大隈重信らと王政復古の運動に参加しました。また、フルベッキと接触したり、『米利堅史（アメリカ史）』を読むなど、外国情勢にも積極的に触れています。そして、幕末の動乱の中、大隈と江戸に入った藍田は、イギリス艦乗組員との交流したり、『華盛頓傳（ワシントン伝）』を読むなど、民主政治体制への強い関心と、新しい日本の進路への思いを述べています。

帰郷後、鹿島藩主鍋島直彬に迎えられ、藩校弘文館教授、権大参事として藩政に参画しました。廃藩後、長崎の「瓊林館」などで講義を行っていましたが、再び鹿島に帰り、「藍田私塾」や「鎔造館」（鹿島高校の前身）で郷人の教育に尽力しました。

Ⅳ 神道への傾斜と皇族進講


皇統綿々として万世尊し　我が王の神算八荒を呑む
礼干義甲の師に敵なし　簞食壺漿民に恩あり
鉄艦飛ぶ時　氷海裂け　日旗飄える処雪山暄し
春来らば予め識め渠魁服し　馬を燕京第一門に立つるを
甲午歳晩北白川親王帥師満清征伐を送り奉る
谷口中秋再拝

↑ 甲午歳晩奉送北白川親王帥師征伐満清

東京に出た藍田は「楽玩盧」で講義を始め、洋学教育に主力をおいた政府の教育の中で、儒教を基礎として西欧文明を受容しようと努力しました。明治23年（1890）儒教的徳目が折り込まれた『教育勅語』の発布を喜び、君子の道や国民が遵守すべき道徳の根源を説いた書を天皇に上奏しました。その中で「易と吾が神道とは符節を合するが如し」、「臣故に経書を以って之を皇典皇謨に合わせ、称して皇道と曰ふなり」と儒教思想によって国を治める基本としました。また日本神話とキリスト教神話の類似性を指摘した藍田は、さらに「易経」と「皇道」との合体へ傾斜していきました。

明治26年（1893）には北白川宮や各宮家の子弟の教育にあたりました。また私塾「麹坊書院」、「藍田書院」を開き、旧藩主や宮中侍従職、政府貴顕らに講義を行っています。その間には北海道や東北・北陸・四国などの旅を続け、各地で講授を行いました。

晩年の藍田

幕末明治の儒学者の中で、藍田ほど旅を愛し山野を踏査した人物も少ないのではないかと思われます。24歳の富士登山記『咬雪遊稿』や『登黒髪山記』など、多くの紀行文にその心情を記録しています。「余は性水の癖あり」という藍田は山野に「活きた易」を探し、孔子の道もそこにあると述べ、儒教の真髄を求め続けました。その思想を託し折々に詠んだ詩は2000篇以上にものぼります。

また多忙な講義や旅の中にあって、毎朝、易書を読み、終生欠かすことがありませんでした。明治27年（1894）大晦日の日記に「今年合計三百六十六遍、總計五千八百九十四遍」と書いています。

晩年の藍田は世俗をはなれ、旅の中で易を読み講じ、酒を酌み、悠々自適の生活を続けました。81歳の藍田は、伊豆修善寺や伊勢大廟などを廻り、体調もよく経書を講ずる日々でしたが、麹町相模屋で入浴後脳溢血で倒れ、明治35年（1902）11月14日午後5時永眠しました。

↑ 八坂神社社額
（有田町中ノ原）

藍田の墓碑 →
（東京都青山墓地）

企画展のお知らせ

谷口藍田展
―旅に生きた儒学者の生涯―

有田町歴史民俗資料館では、平成７年度の企画展「谷口藍田展」を３月５日（火）から開催します。

谷口藍田は有田で生まれた儒学者です。今回の企画展では、藍田の足跡をたどりながら、彼が書いた「掛軸」「原稿」「手紙」などを中心に展示し、彼の業績と人間像にスポットをあててみました。

■期　間　1996年３月５日（火）～３月24日（日）
■場　所　泉山　有田町歴史民俗資料館
■展示品　藍田書（軸装）　13点
　　鍋島直彬書・他（軸装）　４点
　　藍田原稿・他　16点
■入館料　大人100円　大学・高校生50円
　　小中学生30円

皿山雀（さらやますずめ）

今回の館報は企画展に併せて、谷口藍田特集です。谷口藍田の子孫・谷口精一さんと中島豊次郎さんから、多くの資料を寄託されています。この貴重な資料をただ単に館内に収めるだけではなく、多くの人に見てもらい、また、教育と人材育成に生涯をかけた有田出身の儒学者・谷口藍田の生き方を知ってもらいたいと思います。バブル崩壊後、私たちが失っている「気骨ある生き方」を彼の足跡が教えてくれているような気がします。（る）

皿山びとの歌
有田町歴史民俗資料館報　No.32

発行年月日 ＊ 平成８年３月１日
編集・発行 ＊ 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地1
☎0955-43-2678　ＦＡＸ0955-43-4185